

スピリット・マイグレーション

Spirit Migration 2

ヒーロー天気
Hero Tennki

主な登場人物

Main Characters

アンドギー博士

“変態博士”の異名を取る
魔道技師。ガウィークとは
昔馴染み。

スアロ

グランダール王国第二王子。
立場を顧みないレイオスに
対抗し、次期王位を狙っている
との噂がある。

ガウィーク

魔物討伐を専門とする、
ガウィーク隊の頼れる隊長。

コウ

精神のみとなって異世界に
やってきた、本編の主人公。
他者に憑依して行動を
共にする能力を持つ。

ロゼス

グランダール王国第三王子。
権力争いの外にいるが、
本人は気にしていない。

レイオス

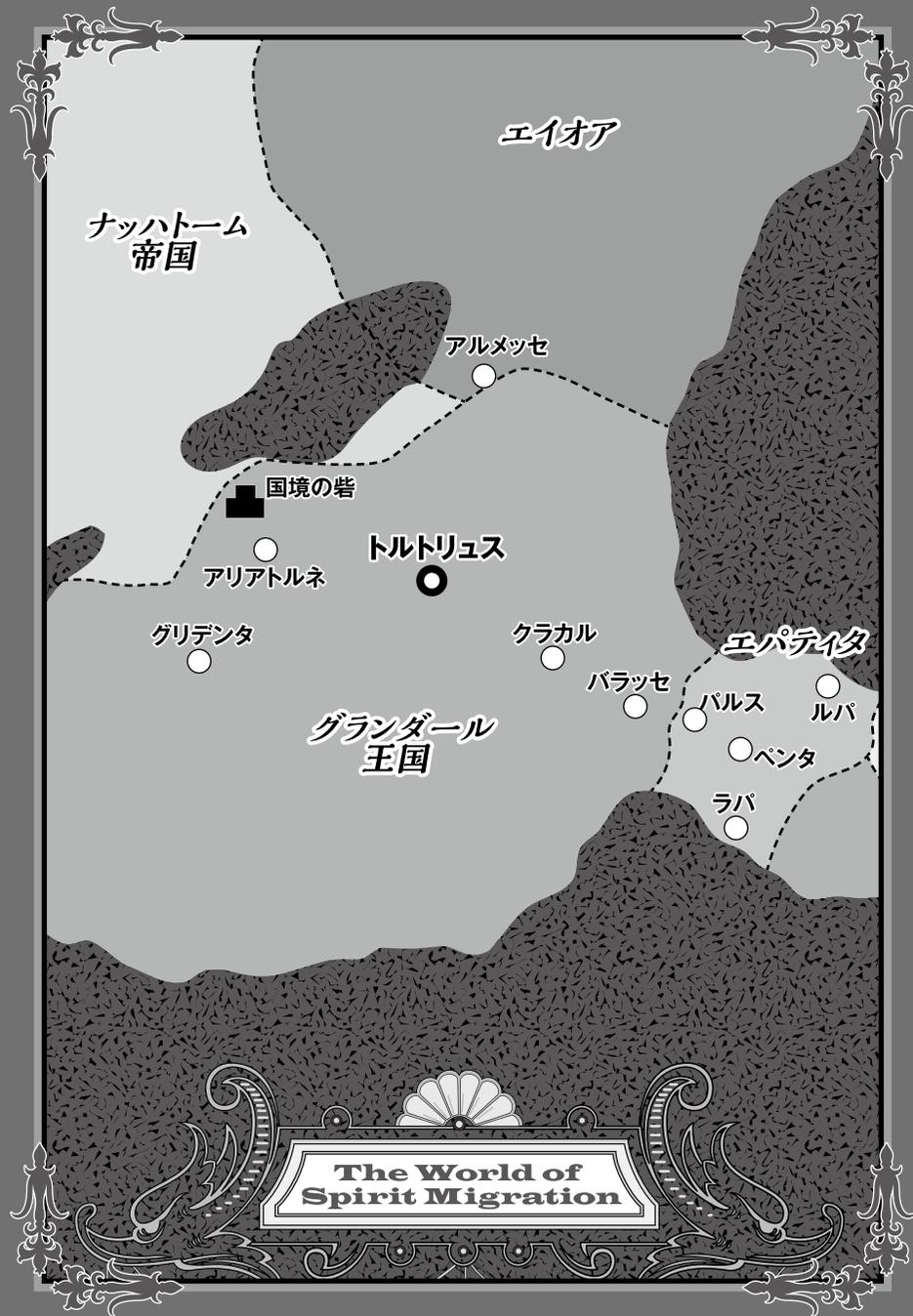
グランダール王国第一王子。
冒険者かぶりで、世界中のダン
ジョンの攻略を目論んでいる。

サヤカ

王都のダンジョンで
保護された謎の少女。
遭難者に指定され、
温情で王都民となる。

カレン

ガウィーク隊の天才射手。
性格は天然で、それ故に
本質を見抜く勘を持つ。



1

応接間と呼ぶには少々絢爛過ぎる雰囲気の一室。あまり慎ましさの感じられない調度品の並ぶこの部屋の中で、長いキセルをくるりと反して煙草盆に灰を落とした壮年の女性が、若干強めの語調で言い放つ。

「お断りだね、うちの娘達にそんな危険な真似はさせられないよ」

「いやいや、危険はほぼないんじゃないよ。ただ使えるかどうかが分からんだけでのう」

女性と対峙する白衣の老人——アンダギー博士は、これだけ出すから誰か紹介してくれんかと、棒状に纏めたギルド金貨の束をテーブルに置く。一本に付き一〇枚で纏められる束が三本。王都の下街に庭付きの家を建てられる程の金額である。

「幾ら積まれようと、うちは——」

「やります！」

金貨の束を前にしても態度を変えず、老人を追い返そうとした女性の後ろから、お茶の用意をしていた下働き姿の少女が声を上げた。

「っ！ サヤ、あんた何を言ってる……！」

「おおっ、君、やってくれるかね」

「待ちなつて、勝手に話を進めるんじゃないよ！ この娘はダメだ」

「お願いします！ わたし、お金が必要なんです！」



グランダール王国の王都トルトリュス。魔術研究棟の施設群を抜ける通りを、一体の甲冑巨人がノシノシ歩いていて。誰かに使役されている、ゴーレムではなく、自我を持ち、自律して行動する生きた甲冑。珍しいゴーレムの冒険者として認知されている複合体であった。

一応「魔法の道具」として扱われる召喚獣やゴーレムには、通常の武器や防具その他の道具と同じように、色々なタイプがある。一体当たりのコストも違えば、性能の良し悪しも様々だ。そんな中でも、極めて特殊な素材で構築され、圧倒的な潜在能力を秘めるこの複合体は規格外の最高級品と言えた。彼が街を歩く姿はここ最近よく見られ、付近を巡回する警備の兵も「ああ、今日は実験の日か」とのん気な様子で見送り、誰何する者はいない。

やがて通りの先にある広場に出た甲冑巨人は、管と歯車が混沌と絡み合うオブジェの塊と化した研究所に入っていく。

「ヴォヴォーウヴォオッハカセー来たよー」

「あらコウ、こんばんは。博士は今ちょっと外出してるのよ、もう少し待ってね」

出迎えたサータ助手によると、複合体に備わっている予備機能実験を行う為、アンダギー博士は実験場となる、ある場所まで交渉に行っているらしい。暫く待っていると、黒塗りの豪華な馬車が広場の研究所前に乗り付けた。その車窓から、当の博士が身を乗り出す。

「おおっ、来ておったかコウ。早速じゃが街へ出るぞい、サータも準備は出来ておるな？」

「はい、博士」

大きな鞆を抱えて小走りに出て来たサータが博士の隣に乗り込むと、馬車はゆっくり走り出す。

「少々目立つかもしれないが、夜間の並走性能実験に丁度良いわい。宣伝も兼ねて隣を付いて来てくれるかの」

「はい」

馬を脅かさないうよう、馬車より少し後方につけてコウは並走する。石畳を叩く蹄鉄と車輪の音に、ゴーレムの足音が混じって響く。

やがて行政府区画の門を潜って城下の街へと下りたコウ達は、まだ少し人通りの多い王都のメインストリートとなる中央通りを、若干の注目を浴びつつ駆け抜けて行った。

そうして辿り着いたのは、中央通りから一つ奥の道へ入った場所に立つ一軒の大きな館。見上げれば厚いカーテンの掛かった窓が沢山並び、薄らとした明かりを確認出来た。一般の宿にしては全体の雰囲気少々豪華で、且つ妖しげな雰囲気に包まれている。

館の正面にある紅紫色をした大きな扉は半開きになっており、壁際には黄色を基調とする艶かしい衣装を着た女性が、通りを行く男達に媚びた仕草で声を掛けています。扉上部にある看板には「胡蝶の館」と書かれていた。

「ここは？」

「娼館じゃよ。さて、前からは入れんじやろうから裏に回るぞ。こつちじゃ」

馬車を降りたアンダギー博士が館の裏手へと歩き出すので、コウも後に続く。

「胡蝶の館」とは、グランダル国内のそれなりに環境の整った街ならどこにでもある半国营遊興施設で、法に則って経営される娼婦の館である。

ここで働く女達は「蝶婦」と呼ばれる。表で客引きをしているのは、下働きの見習い期間を卒業して、実際に客を取る事が出来るようになった新米蝶婦である「黄蝶」達だ。

「今日の実験は、複合体の生殖器官がちゃんと機能するか否かを見るのじゃ」

「肉体を持ったあなたに性的欲求が生まれるかどうか、観察の対象になるわ」

博士が実験内容を端的に告げると、サータがその目的を簡単に説明する。

「ヴォオオオ……(性的欲求……)」

「まあ、器官と言っても普通に管がくつついとるだけで、排泄その他の機能まではないがの」

コウの肉体となっている複合体は、とにかく特殊な素材で組上げた擬似生命体なので、色々な要素を実験出来るような様々な機能を搭載したらしい。なぜゴーレムや召喚獣の類に生殖器をつけよう

などと考えたのかと問われたならば、博士は「需要があるからじゃ」と答えるのであった。

「擬似生命体にも色々な使い道があるのじゃよ」

「普通は戦闘用ゴーレムで試そうなんて人はいませんがね」

カッカツと笑って多様性を語る博士に、サータ助手は一応突っ込んでフォローしておく。

「なるほど」

コウは博士達の思考から、戦闘目的以外の召喚獣の用途情報を拾い、納得する。女性型召喚獣の研究や開発は随分進んでいるが、男性型召喚獣の研究はあまり盛んではないらしい。人気のない分野にこそ邁進しようとする所が「博士らしい」と言える。

館の裏手に回ると大きな馬車でも入れそうな搬入口が開いており、光沢のある銀色のシンプルなドレスを纏った女性が、長いキセルを手にして立っていた。彼女は館の蝶婦達を取り仕切る女主人で、皆からはマダム・サリーナと呼ばれている。博士が早速彼女に声を掛けた。

「待たせたな、部屋の準備は出来ておるか？」

「フウ——そいつかい？ 生きたゴーレムつてのは」

「身体は複合ゴーレムじゃが中身はれっきとした人間じゃよ、名はコウじゃ」

「ふうん——ちとデカイね……」

ゆったりとした仕草も色っぽく、流し目でコウを観察するサリーナは「本当にモノは大丈夫なのか」「万が一の時は身元引き受け人になってくれるのか」など、博士に色々と問い掛けては、フ

ウーっと煙を吐き出している。

「はあ、まったく……あの娘も幾ら報酬がいいからって、こんな仕事引き受けることあないのねえ」

気が進まなそうな様子で煙と共にそんな呟きを吐き出したサリーナは、ぼくっと突っ立っているコウをちよいちよいと指で呼び寄せると、大きく背中の開いたドレスから艶かしい肌を晒しつつ館の中へと入っていく。

「よし、行くぞコウよ」

「まずは全身の洗浄からですね」

「はい」

搬入倉庫の一面を仕切って特別に作られた実験室にて、茶蝶の衣装を纏った少女がそわそわと落ち着かない様子で、魔導技師アンダギー博士と実験ゴーレムの到着を待っていた。茶蝶の衣装は、彼女がまだ客を取れない下働きの身にある事を示している。

少女が複合体性交実験の被験者に名乗りを上げたのは単純に、提示された報酬の大きさが理由だった。博士が提示した報酬額ほどの大金があれば、胡蝶の館を出て下街に家を買う事も出来る。

これまでに稼いだ分も合わせれば、この世界で静かに慎ましく生きていくのに十分な資金を得られる。

少々特殊な事情を経てここ王都トルトリュスにやって来た彼女は、その特異な経歴故か、世間から冒険王子と謳われるこの国の第一王子に大層気に入られた。

一時は王宮に住まうよう部屋を用意されたりもしたのだが、彼女と王子の関係は多くの貴族達を巻き込んだ権力争みの騒動にまで発展してしまう。

紆余曲折あって王宮を出た彼女は、若い女性なら訳有りでも働ける胡蝶の館に入る事になったのだ。

「サリーナさんにはお世話になったけど、やっぱり普通の暮らしがしたいもんね……よし、頑張れわたし！」

ぐっと両手を握って自身を鼓舞していた少女だが、実験室に現れた巨漢ゴーレムを見た途端、思わず腰が引けてしまった。

「……だ、大丈夫よね……？」

急ごしらえの実験室にやって来たコウは、ベッド代わりの台座に腰掛けている少女に違和感を覚えた。グラウンドールに住む人々とは明らかに違う、彫りの浅い顔立ち。根本的な人種の違いを感じるその容貌に、コウは親しみのような印象を持った。

「この娘が今回の実験に協力してくれる蝶婦見習いの——えー、なんじゃったかの？」

「沙耶華です、皆からは沙耶って呼ばれます」



「ヴォヴォーウ……ごんばんはー……?」

博士に紹介され、コウは台座から立ち上がった黒髪の少女と挨拶を交わす。彼女の名前の響きにも、親しみのような、既視感にも似た違和感を懐く。

『んん?』

なんだろう? と首を傾げているコウに、とりあえず台座へ上がるよう指示を出した博士は、実験の準備を始めた。

実験といっても、性行為に至るまでと、その最中に複合体内を巡る魔力の流れを観測して記録するだけだが、ここで記録した測定情報は後々の召喚獣開発の糧となる。

「サヤ? 顔色が良くないね、気が変わったんなら止めとくかい?」

「いえ、大丈夫です」

マダム・サリーナが心配そうに声を掛けるが、沙耶華は気丈に笑って見せた。

仮設実験室には、複合体と幾つかの管で繋がれた魔力観測用の魔導機器が並べられている。イザという時の為に胡蝶の館お抱えの治療術士も待機しており、サリーナも館の主として実験を見守るべく留まっている。

従って沙耶華はゴーレム相手に、何人もの人が見ている前で行為に及ぶ訳だ。これにはさすがに恥ずかしさが込み上げて、今更ながら躊躇した。だが、今回のチャンスを逃せば、いつか蝶婦として客を取る生活に突入してしまう。

今はまだマダム・サリーナの温情か、普段はお手伝いのような下働きの仕事と、時々会いに来るバカ王子の相手をする程度で済んでいるが、この先「黄蝶」に昇格すれば、他のお姉さま方達と一緒に店の前に立って客引きをしなくてはならない。

「ええい、ここで怯んでどうするわたしっ。フアイトだ！」

沙耶華はこの国の人々には分からない言葉、恐らくはこの世界に存在していないであろう故郷の言葉で、小さく自分を励ました。その小さな呟きにコウが反応する。

「ヴオオ、ウヴオヴオウ？ 今の、なんて言ったの？」

「え？」

突如、胸元に光の文字を浮かび上がらせて問い掛けるように唸るコウ。先ほど挨拶した時にも唸りながら文字を浮かべていたので、何か話し掛けられているらしい事は沙耶華にも分かるのだが、まだ文字の読み書きが拙いので内容を読み取れず、小首を傾げた。

「ええと、困ったなあ……わたしこっちの文字はいまいちよく分からないんだけど……」

そう呟きながら、沙耶華が壁際の博士達に助けを求めようとした時、次に浮かんだ文字の羅列に一瞬思考が固まる。

「日本語!? それ、ひらがな……うそっ、あなた日本語が分かるの？」

「あ、やっぱりこのもじでつうじるんだね」

一方のコウも、いつもの「言葉に乗った思考」を読み取るという感覚ではなく、直接呟きの意味

を理解出来た事に一瞬思考が混乱した。

最近では理解出来るようになってはいるが、コウは基本的に相手の言葉ではなく、そこに含まれる意識や思念を読み取ってその内容を把握し、意思の疎通を図っている。

コウにとつてこの世界の人々が話す言葉は知らない言語であり、声に紡がれる言葉はあくまで音として認識していた。ところが、先程の彼女の呟きは、音ではなく言葉として直接意味を理解する事が出来た。

そして沙耶華が戸惑うように口にした独り言を聞き、コウはそれが自分の中の欠けた記憶に刻み込まれている言葉である事を認識した。

彼女がハッキリと反応した異世界の文字。日本語というモノらしい。

「うーむ、こりゃあいつたいたいどうした事じゃ？」

突然、耳慣れない異国の言葉と、見た事もない文字とで会話を始めた沙耶華とコウに、アンダギー博士はポリポリと頭を掻きながら首を捻る。サータ助手はマダム・サリーナに説明を求めたが、サリーナも肩を竦めるばかりだ。

「彼女は呪術士や祈禱士の術を？」

「知らないね、ただあの娘が術士とかじゃないのは確かだよ。あの言葉だって意味は分からないが、時々独り言で話してるからねえ」

ゴーレムや召喚獣の制御に影響を与える呪術語の類ではない事を理解したサータは、博士にコウ

から事情を聞くよう促す。興奮気味に会話をしていた沙耶華は我に返ると恥ずかしそうに顔を伏せ、コウからは彼女についての驚くべき情報が語られた。

「異世界からの来訪者とな？」

「うん、上手く説明できなくてややこしいから今まで黙ってたんだけど、多分ボクも同じ所にいたんだと思う」

沙耶華がこの世界に現れたのは一年ほど前の事だった。元の世界で旅客機の墜落事故に遭い、気が付くとこの世界にいた。王都のダンジョンで目覚め、モンスターに追われていた所を訓練中の騎士団に保護されたのだ。

騎士達にとつては見慣れない服装で丸腰、ダンジョンの探索許可書も身分を証明するモノも所持しておらず、言葉も通じない。暫く取り調べを受けた後、グランダールに害意なしと判断されて遭難者に指定され、温情で王都民として受け入れられた。

しかし当然ながらこの世界に身寄りはない。冒険者となれる程の力も知識もなく、意思の疎通さえも片言という状態では、まともな働き口など見つかるはずもなかった。王宮周辺の屋敷群に住まう事を許されていたりもしたのだが、ここでは連日偉い人達の騒動に巻き込まれるので、落ち着いて生活も出来なかった。仕方なく、健康な若い女性であれば誰でも働けるこの胡蝶の館で、蝶婦をする事になったのであった。

異世界から来たという話は周囲に上手く伝わっておらず、グランダールと同じくらい魔導技術の進んだどこか遠い国から転移事故でも起こして跳んで来たものでは？ と認識されている。

「ふーむ、興味深い話じゃな。コウよ、同時通訳は面倒じゃろうから後で書類に纏めて提出してくれんかの？ 実験は一旦中止じゃ」

博士はコウに沙耶華ともっと話をして色々聞き出しておくように指示すると、マダム・サリーナと何やら相談を始めた。コウは自身も沙耶華と同じ異世界人だった可能性を沙耶華に伝え、他にも同じように異世界から来た人間がいるかもしれないと会話を盛り上げる。

「さやかはおうとからでたことはないの？」

「うん、街の外って危ないんでしょう？ わたし冒険者とかそういう素質ないから、街からは怖くて出られないわ」

「そっかー」

「もし他にもわたし達みたいながいるなら、会ってみたいわね……もしかしたら、帰り方とか分かるかもしれないし」

他者に乗り移る力を持つコウならば、冒険者として世界を巡り、同胞探しの旅をする事も出来るが、ごく普通の一般人でしかない沙耶華には少々酷だろう。ベッド代わりの台座の上で二人がそんな話をしている間、博士はサリーナから沙耶華の詳しい事情を聞き出していた。

「ほう、あの王子がのう」

「サヤはあんまり気がなさそうにしてるけどね、それが却って王子様の気を惹いちゃってるみたいだよ」

沙耶華が騎士団施設に保護されていた頃、ダンジョンで発見された謎の美少女という触れ込みに興味を懐いた冒険大好き王子こと第一王子のレイオスが、度々彼女の所を訪れていたという。一時は王宮区画である城下の屋敷群に招いて部屋を与えていたりもしたらしい。

取り調べと審査を終えて王都民に迎えられ、胡蝶の館に入った今でも、時々会いに来ていた。

当の沙耶華は屋敷群で取り調べを受けながら過ごした期間に、貴族令嬢達からの執拗かつ陰湿な嫉妬攻撃に曝されて辟易していたので、レイオス王子の事は適当にあしらっている。が、その素っ気ない態度がまた王子を惹き付けている事に気付いていない。

マダム・サリーナはレイオス王子の気持ちに配慮し、沙耶華には下働きと王子のお相手しかさせていない。勿論、単に沙耶華と王子を応援しようというだけではなく、この館に対する第一王子の覚えをよくしておく為でもある。

「しかし異界の存在に世界移動か……異次元倉庫の事といい、何か別次元への干渉に関する手掛かりが掴めるかもしれないな」

「この話、本気なんだろうね？　ちゃんと面倒見られるのかい？」

「案ずるな、これでも養子の一人や二人普通に育てた経験もあるわい」

クワツカカカと笑う博士は、サータ助手と胡蝶の館お抱え治癒術士を立会人として、マダム・

サリーナが用意した書類にサインを入れた。

それは「蝶婦見習いサヤカ」の身元を引き受けるという保証誓約書。これにより沙耶華の身元がアンダギー博士によって保証されると同時に、その身柄は博士の元へと預けられる事が決まった。

「さて、サヤカ嬢や。ワシがお主を引き受ける事になったでな、明日からはワシの研究所に住まうが良い」

「えっ！　い、いつのまに……」

「ハカセはいいヒトだよ」

懐かしい故郷の言葉に触れて感傷にふける間もない早業。沙耶華にとって身元引き受けの話は寝耳に水だが、マダム・サリーナが許可したのであれば逆らえない。「身元引き受けを申し出る者が現れた場合、館主が見定めてその可否を決める」、これは胡蝶の館に入る時の契約なのだ。

「いや〜しかし思わぬ所で面白い研究対象が見つかったのう、クワツカカカ」

「か、解剖とかされないよね……？」

「だいたいぶだよー、たぶん」

「絶対って言うてーっ」

コウを通じて異世界人である事が伝えられた沙耶華は、今後は博士の元で研究所の手伝いをし、研究対象になりながら、元の世界に還る方法を探す。

見た目もちょっと不気味なアンダギー博士に恐々としつつ、沙耶華は早速私物の整理を始め、お

世話になった館の人達へお別れの挨拶に回る。コウが沙耶華との会話を書類に纏めてサータ助手に提出すると、今日はそのまま解散となった。

『さて、まだみんな集まってるだろうから、顔出しにいいのかな。ボクも隊のメンバーだもんねっ』
胡蝶の館を後にしたコウは適当な路地にいる猫に憑依すると、複合体を異次元倉庫に片付け、なじみのガウイク隊が集まる酒場を目指した。王室主催の武闘会の予選が近いので毎晩作戦や情報分析などが行われており、コウもグループ戦のメンバーとして連係の打ち合わせに参加するのだ。

「コウちゃんのえっちい〜」

今日の実験は中止になってしまったが、胡蝶の館とある少女に出会った事を話したコウは、なぜかカレンに指でつんつんされてしまったのだった。

2

アンダギー博士の研究所に新しく増えた研究対象兼お手伝いの少女が、同じく研究対象である複合体のゴレムとお喋りをして過ごしていた。

「それでね、その人って本当は王女様なんだって」

「べー、いろいろあるんだねー」

博士の研究所に住み込んで働く沙耶華は、実験でやって来るコウとよく待ち時間などに話をする。博士曰く、同郷の者同士で会話を続けていけば、何かの拍子にコウの欠けた記憶が蘇るかもしれないので、どんどん話さないとの事だった。

沙耶華がこの世界に來てから出会った人達や経験した事などを話していると、ふいに來訪者を告げる鐘が鳴った。ごてごてした外装の研究所も出入り口の扉だけはシンプルな作りになっており、開閉によって小さな鐘が鳴る仕掛けが施されていて、あまり頻繁に開け閉めするとカンカンやかま喧しい事になる。

その扉がノックもそこそこ開かれた。入って来たのは少年のあどけなさも残る精悍せいけんな顔立ちで、細かい刺繍の入った煌きらびやかな服装の青年だ。

「まさか博士に引き取られるとはな……枯れた老人がお前の好みなのか？」

彼は沙耶華の姿を見つけると開口一番、そう言い放った。

「気付いたらいつの間にか話が決まってるんです、人を老い専せんみたいに言わないでください」

「わしやまだ現役じゃぞ」

沙耶華はいつもの調子で応対し、計測器の調整をしている博士が部屋の奥から抗議する。青年の名はレイオス。グランダール国王レオゼオスと、王妃エリシユオーネとの間に生まれた第一王子その人であった。

レイオスは博士の抗議を聞き流しつつ、沙耶華と向かい合っているコウを、値踏みするような視線で見上げる。

「これが噂の新型、ゴーレムか、中身が人間というのは本当か？」

「ごんにちは」

「なるほど、文字で意思の疎通をする訳か。面白いな」

「サヤちゃんと同郷の人らしいんですよ？」

サータ助手が王子をお茶でもてなしつつ、複合体の中にいるコウについて説明する。性交実験の被験者に沙耶華が名乗りを上げて以来、この世界とは異なる文明を持つ別世界が存在しているらしい事など、中々に貴重な事実が幾つか明らかになっている。

「性交実験……？」

「ええ、この複合体には生殖器が備わっていますから、その機能実験に——」

「なにっ、コレとやったのか！」

出されたお茶に口を付けながらサータの話に耳を傾けていたレイオスは、思わず沙耶華に詰め寄る。

「コレじゃなくてコウちゃん。実験は中止になったからしてませんっ」

少し顔を赤らめた沙耶華がきっぱり言い切ると、レイオスは「そうか」と安堵の表情を見せた。

コウと沙耶華はレイオス王子も交じえて、最近の王都や互いの近況について語り合う。レイオスは博士が沙耶華の身元を引き受けた事を評価していた。やはり働いている場所が場所だけに、いつ他の男を客として——と考えると、気が気ではなかったようだ。

「そういえば、コウちゃんは実験に來ない時って何してるの？」

「ボクはガウイクたいのみんなとくんれんしてるよ」

「今のは何と答えたのだ？」

沙耶華がコウの書き出した異世界の文字の内容を伝えると、レイオスの表情に若干の鋭さが浮かんだ。

「ほう、お前も武闘会に出るのか」

コウがガウイク隊として武闘会に出る事を聞いて、レイオスはそちらにも興味を持つ。もしコウが使える、ゴーレムなら、是非とも自分の隊に引き入れたい——沙耶華とコウの両方を手に入れる良い方法はないものかと考えてみたりする。

(ロゼスなら何か良い手でも思いつくんだろうけどなあ)

レイオスはふと聡明な弟の事を思い浮かべる。

言葉に乗った思考から相手の胸の内を読み取れるコウは、レイオスの思考からは悪意や害意が感じられず、彼の事を良い人っぽいと認識した。沙耶華に対する気持ちも「興味がある」程度ではなく「いつも一緒に居たい」といった感じで、沙耶華に本気の好意を懐いているらしい事が分かる。

一方の沙耶華は、王子様の気まぐれのせいでも面倒な貴族令嬢達に睨まれるのは迷惑だと感じ、またレイオスが本気で自分を好いてると思っただけ。そしてレイオス自身も、沙耶華が自分の気持ちを信じてないというか、そこまで本気であるとは気付いてない事に気付いている。

沙耶華がレイオスを見る目は達観で、レイオスが沙耶華を見る目は情愛だ。

「コウや、そろそろ実験を開始するぞい」

「はい」

そこへ博士が声をかける。今日の実験は細い木板の上を移動する姿勢制御実験なのだが、コウが動かしている複合体には簡単過ぎる。そこで、片足で跳ねて移動するという、通常のゴーレムではまず不可能な動きを実験する事となった。

また後でねーと沙耶華に手を振ると、コウはのっしのっしと研究所前の実験広場へと歩き出した。

「……んっ……ちよつと、まだコウちゃんが……」

「背中に目は付いていない」

そんな男女の声にちらりと精神体だけで振り返ると、背後でレイオスが沙耶華の唇を奪っている。これは王宮群の屋敷にいた頃からのいつもの行為だ。ぼしょぼしょと小声で抗議する沙耶華に構わず、レイオスがその口を塞ぐ。

二人のやり取りから読み取る限り、「ハイハイ、唇吸いたきやお吸いなさいな」と若干醒めた様

子の沙耶華に対して、レイオス王子は「届け、俺の気持ち！」と心の叫びを籠め、すっかりすれ違っている。

『教えてあげた方がいいのかなあ……でもなあ』

以前出会った少女アリスとの一件を通じて、無闇に他者の心の内を伝えたりしない方が良いという教訓を得たコウは、そういった行為を自重している。例えばガウイク隊中で、カレンに対するダイドの気持ちなども——彼の場合は外見にもバレバレではあるが——見て見ぬ振りをしているのだ。

温度差のある口付けを交わす二人を尻目に、コウは片足跳び実験へと赴くのだった。



ズッシンズッシンと広場に複合ゴーレムの足型を残して実験を終えたコウは、午後からはガウイク隊の訓練に参加する。王都を囲う重厚な壁の外周、険しい岩山の麓となる外壁の裏側など人目に触れない場所で、陣形や連係攻撃の訓練を行うのだ。

「へえ、レイオス王子に会ったのか」

「まあ気さくな王子様ですからねえ」

コウの話聞いたガウイクとマンデルが王子の親しみ易さを話題にすると、カレンとレフが具

体例を挙げる。

「あたし、てのうらにチュってされたコトあるよ？」

「……私もされた」

あの王子も恐らくグループ戦に出てくるだろうと話し合う面々。レイオス王子が率いる冒険者グループは、一般には閉ざされた城の敷地内で訓練しているらしく、詳しい情報が集められない。メンバーも一流どころを揃えて来るのは間違いないので、一番の難敵になりそうだ。

ガウイク隊の陣形はガウイク隊長とマンデル副長が前衛、レフ参謀とカレンが後衛、コウは双方の補佐に動けるよう真ん中に陣取る。

陣形の中心は本来、司令塔となるガウイクの立ち位置なのだが、まだコウは前衛を任せられる程集団戦闘に慣れていない。いくら経験を積んでいるとはいえ、未だその実力は未知数なのだ。参加メンバーの都合上、こういう配置になった。

しかし、隊のナンバー1とナンバー2の背後に複合ゴーレムの巨体が控える陣形は、中々に威圧感を稼げる。その更に後方から攻撃術士と射手が狙っているのだから、後衛を護る壁役としても最適だ。対戦相手にはかなりの重圧プレッシャーを与えられるだろう。

「コウには序盤から魔術を使わせませんか？」

「相手にもよるな、出来れば隠し玉にしておきたい所だが」

「……一つ、提案がある」

戦術を話し合うガウイクとマンデルに、レフはコウの役割に攪乱かくらんの要素も入れようと提案した。適当に小さな虫などを用意してコウの身体にくっつけておき、複合体を異次元倉庫に隠して虫に憑依すれば、戦場を自由に移動する事が出来る。上手く使えばゴーレムが複数の魔術を使う以上の隠し玉になる筈だ、と。

「ふむ。あまり常用はできないが、効果は期待できるかもしれないな」

特殊な存在であるコウにしかできない戦法になるので、ガウイクはそれに頼り過ぎないよう限定的なやり方として戦術に組み込もうと考えた。試合中は何度倒されようと薬なり治癒術なりを使って回復し、戦闘に復帰出来るという武闘会の规则的に、攻めの姿勢が基本となる。その為、通常はコウを軸にしてレフとカレンの援護を受けながら、ガウイクとマンデルで斬り込むスタイルになる。

「よし、とりあえずこの構成で幾つか試して、後は個々の動きを合わせていこう」

「……了解」

「おーっ」

「おー」

夕暮れまで訓練を続け、そろそろ宿に引き揚げるといふ段になると、コウは草むらで甲虫を見つ

け、複合体を異次元倉庫に片付けてその虫に憑依。レフのフードにくっ付いた。

複合体がガウイク隊と一緒にいる所をあまり見せないようにする事も、既に始まっている情報戦略の一環なのだ。

「コウちゃん、ネコは？」

「近くにみつけたらね」

街の野良猫とて、そうそう簡単に憑依させてくれる訳ではない。犬や猫には精神体であるコウの姿が見えているので、油断しているか、こちらに興味を持つなどしてその場に留まっていってくれなければ、憑依可能な距離まで近付く事が出来ないのだ。

日替わりする猫の抱き心地を楽しみにしているカレンは「そっか」と残念そうに呟いたのだ。

武闘会予選前日。

各地より集まった有名冒険者グループ、武勲に名高い傭兵団から無名の戦士までが名を連ねる武闘会。予選の組み合わせが闘技場前の掲示板に貼り出されると、多くの参加者達が自分の対戦相手を確かめては続行か棄権かを選び、早くも勝敗が決まっていく。

棄権の申し出があればその都度対戦表が書き換えられるので、この日の内に十四度も新たに対戦表が貼り出され、それからようやくそれぞれの対戦相手が確定した。対戦表の発表と貼り出しはも

はや予選の予選とも言える。

ここから先は参加費用が掛かり、本選に入れば棄権は不可。一応、故意に相手を殺めない事が規定に入っているので、運が悪くなければ敗北しても怪我だけで済む。

怪我の程度は軽傷から冒険者として再起不能に至るまで様々ではあるが、怪我をさせる側も同業者や世間での評判に関わるので、滅多にそこまで酷い事にはならない。

掲示板前には、ガウイク隊長とマンデル副長の姿もあった。

「うちの相手は『紅狼傭兵団』か」

「正統派の中堅傭兵団ですな、まあ無難な所でしょう」

対戦表に有名なグループがあればチェックしておこうと二人で掲示板を眺めていると、やはりレイオス王子率いる冒険者グループ『金色の剣竜隊』があった。名前の由来は、伝説級である『黄金の剣と竜』の称号メダル取得を目的としているからだとか。

他にも要注意グループを幾つかチェックして、宿に戻る。

「一つ、面倒な所がありましたね」

「ああ、ヴァロウ隊な……あそこは当たりたくないモノだ」

ヴァロウ隊とは、ガウイク隊と同じ『戦斧と大蛇』のメダルを持つ討伐集団である。ただし、ガウイク隊が魔物の討伐を専門にしているのに対し、ヴァロウ隊は盗賊団など人間相手の討伐を専門にしている。

傭兵団と違うのは、冒険者協会から仕事として討伐を引き受けるのではなく、自主的に盗賊達を探し出して討伐する集団である所。盗賊団から奪った財宝をそのまま報酬として懐に入れてるので、戦功と共に悪名も広まっている。

一般的な世評と冒険者協会の仕事に関する功績とは切り離されて評価される為、戦闘殺戮集団と呼ばれながらも実績を評価されて「戦斧と大蛇」のメダルを持つに至った。そういう意味ではガウイク隊よりも戦闘力は高く、非常に強い相手だといえる。

「まあ王子の所も大概反則じみてるんだから、向こうと当たってくれりゃあ助かる」

「ははは、違いありませんな」

ガウイク達が闘技場に出掛けていた頃、いつものようにアンダギー博士の研究所を訪れたコウは、明日からガウイク隊の一員として武闘会に出場する為、暫く来られない旨を伝えた。博士達もその事は既に承知しており、頑張つて来いと励ます。

「しっかりと活躍してワシの名声に貢献するのじゃ。どれ、一つ餞別をやるう」

博士がこつちや来いと、コウを研究所の奥にある屋内実験室に呼ぶ。

「これは？」

「サヤ嬢の異世界に関する証言からイメージを得て作った魔導兵器じゃ、持って行くがええ」

「多分、複合体にしか扱えないでしょうけどね」

魔導兵器を受け取るコウに、サータが苦笑気味に言った。

博士が異世界の情報を基に作ったという箱状の魔導兵器を抱えたコウは、何となく知っているモノであるような気がした。欠けた記憶が反応するような感覚があるのだ。長めのベルトが付いており、肩に掛けて腰撓めに構えながら使うモノらしいが、結構重い。

「本体の魔導器で精製した火炎玉を前方にある複数の管から順次射出する仕組みなんじゃがの、ちーとばかし反動が酷くてのう」

最初は一本の管から一発ずつ火炎玉を射出する機構で進めていた。だが、細い管から射出する火炎玉は威力が低く、沙耶華の話にあった魔導技術無しでも高威力を誇るといふ異世界の武器には遠く及ばず、とても兵器と呼べる代物ではない仕上がりになったそうなの。

そこで負けてなるものかと奮起した博士は、得意分野である魔導器の改良に着手。沙耶華の持つ僅かな知識に倣い、爆発によって威力を高めるといふ点を流用して、魔導器の中で小規模の爆発を起こして火炎玉の射出速度を上げる試作内燃魔導器を開発した。

だが、一発で十分な威力を引き出せるまで出力を高めた結果、射出する際の爆発に魔導器本体が耐えられなくなった。ならばと本体の強度を連続使用に耐えられるまで上げてみたが、今度は持ち運びが困難な程の大きさと重量になってしまったのだ。

これでは攻城戦などに使われる大型魔導砲を小さくしただけのようでインパクトに欠ける上、面白くないと博士は考えた。そしてこういう射出系武器に良いアイデアはないものかと沙耶華に意

見を求めてみた所――

「うーん、そういえばあのゾンビ映画で怪物が使ってた……えーとですね」

こうして、複数の内燃魔導器を搭載して複数の管から連続で火炎玉を射出するという仕様の魔導兵器が出来上がった。

威力もインパクトも十分だが、最終的に酷い反動だけは残っている。

「台座に固定しての屋内実験しかしておらんが、品質は保証するぞい。一応試し撃ちはしていくがよこ」

「とても狙いなんてつけられないから、味方の居る方向に使っては駄目よ？」

「ヴォウウ（はいい）」

ガウイク達も知らない、博士達からの贈り物。連係の訓練は一応昨日終わってしまったので、よく状況を見定めてから使うようにしなければならない。

『そうだ、ガウイク達の言っていた、ボクだけの“隠し玉”にしよう』

そうしようしようと「いい事を思い付いた」とばかりに、もらった内燃魔導兵器を異次元倉庫に仕舞うコウなのであった。

3

功績のあった冒険者に冒険者協会から贈られるメダルには、脱初心者クラスから熟練者クラスまで様々なランクがある。その中で熟練した冒険者である事を示すメダルが“剣と猛獣”であり、紅狼傭兵団はその“剣と猛獣”のメダルを持つ、中堅層の傭兵団であった。

「相手はあのガウイク隊だ、ともに戦っても勝ち目は薄い」

「向こうは前衛主力メンバーの闘士と剣士が個人戦に出るって話だからな、恐らくグループ戦では隊長と副隊長を前衛にした構成でくるだろう」

武闘会の予選でガウイク隊と当たる事になった彼等は、闘技場の戦士控え室にて作戦の最終確認をしていた。紅狼傭兵団の隊長と参謀が敵味方に見立てた小石をテーブル上に並べ、全体の動きを説明する。

「そこで、こういう戦法をとる」

「一度しか使えない奇策だが、上手くいけば最初の奇襲で確実にどちらか片方は討ち取れる筈だ」

「後は援護のない方から数で押す訳か、速攻が決め手になるな」

「そろそろ時間だ、行こう」

その説明に全員が納得し、ほぼ一か八かの作戦に賭ける事にした紅狼傭兵団は、戦いの舞台へと上がるべく控え室を後にした。

王室が主催するこの大武闘会は、予選から名のある戦士達が剣を交えるにあつて、王都の住人は勿論、近隣の街や村などからも多くの人々が観覧に押し寄せている。

こういった大きな大会ではしばしば、後に世界で名を馳せる事になる戦士が活躍する場合もあり、メンバー募集中の集団にとつては優良な人材発掘の場になっていた。

「凄い人だなあ」

「本選はもっと多くなるからな、今から慣れておけよ？」

半分ほど地下に掘り下げられた、すり鉢状の円形闘技場。入場口が四箇所あり、うち二箇所が地下にある戦士の控え室と繋がっている。残り二箇所は猛獣や馬車などを通す為の広い大型通路で、猛獣の通路は奥の檻に、馬車の通路は闘技場の外に続く。

土や砂の敷き詰められた戦闘区域は縦横二〇〇ルウカ。コウの知る単位で表すならおよそ九万平方メートルという巨大さを誇る。

これから対戦する両者が姿を見せると、闘技場の進行官が声高に予選の開始を告げる。

「これよりー！ 王室主催、トルトリュス大武闘会のー！ 予選を執行行ー！」

観客席からひと際大きな歓声が響き、ガウイク隊と紅狼傭兵団それぞれが所定の位置につく。

ガウイク隊は複合体を中心にガウイクとマンデルが前衛、レフとカレンが後衛でそれぞれ等間隔に立つ。対する紅狼傭兵団は前衛四人、後衛二人という密集陣形を取っている。双方の間はおおよそ一〇〇メートルといった所だ。

「ガウイク隊のあれって召喚獣か？」

「いや、新型のゴーレムらしいぞ」

「何でも元冒険者だった人間の人格を持っているとか」

「協会の冒険者名簿に登録されてるんだってな、例の変態魔導技師博士が絡んでるって話だ」

予選の第一戦から見に来ているような観客は、各団体の情報にもそれなりに詳しい一般人が多く、彼等はこの頃街でよく見かけるコウについてもある程度の情報を掴んでいた。

偵察も兼ねて見物に来ている冒険者グループや傭兵団の者達も、ガウイク隊の隊員として扱われ、冒険者協会に一冒険者として登録されている一風変わった新型ゴーレムに注目していた。

やがて試合開始の合図が告げられる。先に動いたのは紅狼傭兵団だった。全員が軽装の鎧に片手剣と小型の盾を装備したスタイルで揃えている紅狼傭兵団が、密集陣形を保ったまま真っ直ぐ突っ込む。

「さうやら向こうは速攻を狙ってるようすな」

「レフ、固まっている所へ範囲魔術を撃ち込め。カレンは敵が散らばらないよう左右を攻めろ。コウはそのまま待機だ」

それを迎え撃つガウイク隊は前衛の二人が若干内側に寄って後衛二人の射線を空け、遠距離攻撃で相手の出方を窺う。まだ魔術の有効射程外なので、レフは魔力を練りながら待機中。カレンは弓を構えて狙いをつけた。

試合に使われる矢は、先端に円柱形の筒を被せたような特別製で、円柱の先についた僅かな突起が突き刺さる以外は殆ど打撃攻撃になるよう殺傷力が削がれている。

ちなみに突起の長さは一ペイル、約一・五センチ程しかないので、当たり所が悪くなければ甲冑を着けていなくてもほぼ軽傷で済む。

カレンの放った矢が風切り音を鳴らしながら紅狼傭兵団の前衛四人の両端を掠めて牽制すると、コウを挟んだ反対側でレフが杖を構えて魔力を編み始めた。

「よし、作戦通りいくぞ！ ゴーレムは無視して構わない、狙いはあの魔術士だ」

距離を詰めた紅狼傭兵団はレフが魔術の行使に入ったのを確認すると、全力突撃に切り替えた。カレンの攻撃に注意しながら陣形を崩し、個々がバラバラに動いているように錯覚させる。

最初に固まって行動したのは範囲魔術を誘う為の策であり、絶妙なタイミングで散らばって見える事で効率の悪さを演出して、範囲魔術の行使を躊躇させたのだ。

そうして魔術が味方を巻き込んでしまう距離まで詰める事に成功。ガウイク隊の前衛に三人一組で斬り掛かり、ゴーレムが援護に出て来るのを待つ。

紅狼傭兵団の奇襲染みた速攻突撃戦法に対し、ガウイクとマンデルは背中合わせに陣取ってひたすら攻撃を捌きつつ防御に徹する。カレンとレフの援護は位置的に攻撃の性質や射線が限定されてしまい、特に威力を抑えた攻撃魔術は殆ど効果が上がらないでいた。

「コウちゃんっ、おねがい！」

「ヴォオウ」

コウはカレンの射線を遮らないよう、レフの正面方向からガウイク達の援護に向かうべく走り出す。そして異次元倉庫に並ぶ戦斧やら鉄槌やらから武器を選んでいると、コウが動いた事を確認した紅狼傭兵団は作戦を次の段階へと進めた。

「今だ、行け！」

ガウイクと打ち合っていた紅狼傭兵団の団長が指示を出すと、二人の団員が盾を構えながらカレンに向かって駆け出した。実戦であれば彼等の持つ小型の盾など厚紙も同然なのだが、試合用の矢なら軽装の鎧と盾で十分防ぐ事ができる。

足を狙って飛んでくる矢は跳ねて躲し、盾と鎧で身を護りながらゴリ押しで距離を詰める。カ

レンを狙う二人の紅狼傭兵団員に気を取られたコウが足を止め、そちらへ踏み出そうとしたその時――

「よし、次だ！」

更に二人、ガウイク達と打ち合っていた傭兵団員が、最初の二人とは逆方向からレフを狙って走り出した。残った傭兵団長と副団長はガウイクとマンデルを牽制しながら、ガウイク隊の内側へと浸透していく。

紅狼傭兵団はガウイク隊の前衛が後衛の援護に行けないよう時間稼ぎをすれば良いので、実力で劣っていても牽制しながら逃げの一手で暫くは凌ぐ事ができる。その間に団員四人で後衛の二人を狙うのだ。

射手も攻撃術士も、接近されてしまえば近接戦闘職に太刀打ち出来ない。たとえ格上の集団であろうと、その力関係に変わりはない。後衛の二人を落としてしまえば、ゴーレムを入れても三対六と圧倒的優位に立てる、そこからは堅実に数で押せば勝利は確実だろう。

ここまで、ほぼ紅狼傭兵団の作戦通りであった。

『あ、あれ？ どっちに行けば……』

カレンへの攻撃阻止に向かおうとしていたコウは、レフを狙って真っ直ぐ向かって来る傭兵団員に戸惑い、再び足を止めた。このまま傭兵団員を迎え撃てば、カレンを狙う二人の迎撃に間に合わ

なくなる。かと言ってカレンの援護に向かえばレフが無防備になる。

どちらを優先すべきか判断しきれずオロオロしているコウを尻目に、攻撃目標へと直走する紅狼傭兵団員。人間の人格が宿っているらしいとはいえやはりゴーレムはゴーレムかと、コウに向けていた警戒意識を若干、攻撃術士の方に割く。

「コウちゃんっ、レフちゃんをおねがい！」

自分の方は何とかするからと言うカレンの指示を受け、コウは背後をすり抜けて行こうとする傭兵団員に向き直るが、もはや武器を出して攻撃する暇はない。なんとか食い止めなくてはと動いたコウは、咄嗟に足を引く掛けようとした。

しかし焦って急激な動作をしようとした為か、イメージと身体の動きにズレが生じてしまい、しゃがみ切る前に引く掛け用の足が出た。

「ヴァ(あ)」

「ぐはっ！」

「なっ!?」

間が悪かったのか良かったのか、通り抜けようとしていた傭兵団員の位置とタイミングが合ったらしく、その足は左横蹴りとなって直撃。真横に吹っ飛んだ傭兵団員はゴロゴロと二、三度転がって動かなくなった。気を失ったらしい。

並んで突進していた傭兵団員は思わず防御体勢をとるが、この場合はそのまま走り抜けるのが正

解であり、足を止めた彼の選択は間違いだった。

コウは「武器を使うよりも直接殴った方が早い」と判断すると、引っ掛ける為に出して蹴りになってしまった足を軸に身体を引き寄せながら、守りを固めている傭兵団員に左腕を振り上げた。

ワアツと会場が沸く。

下から掬い上げるようなパンチを貰った傭兵団員は、ゴーレムの身長に腕の長さより更に一人分程度を足した高さまで跳ね上げられた。

殴り飛ばされたというよりも、振り上げた腕の先に引っ掛かるような形で放り投げられたこの傭兵団員は、落下の衝撃が原因で動けなくなつた。しかし見た目は完全に強烈なアッパーカット。観客達の間では「顔が潰されたのではないか」とざわめきが上がっている。

「なんだあのゴーレムは」

「やたら動きが早いぞ、まるで人間みたいじゃないか」

偶然とまぐれで何とか迎撃を果たせたコウは、今度こそカレンの援護に走り出した。レフも護身に練っていた魔力を傭兵団員への牽制に回して援護する。カレン自身の弓の腕もあつて、どうにか接近を防いでいた所へ、コウが飛び込み、壁となつて立ちほだかる。

通常、ゴーレムと言えどもっとノツソリと動くモノのだが、まるで人間のような自然な動作で全力疾走して来た複合ゴーレムの姿に、観客も偵察グループも皆が度肝を抜かれた。王都内を巡る博士の実験で運動性能の高さもある程度は周知されていたとはいえ、ダッシュをかますゴーレムな

ど普通はあり得ない。

「いいぞコウ、その調子で行け！」

足止めの牽制に徹する紅狼傭兵団の団長と激しく斬り結びながら、じりじり押し込んで来たガウイークがコウに声を掛ける。

ガウイークの励みから「接近格闘型と思わせられれば後の試合でも有利に事を運べる」という思考を読み取ったコウは、何かそういうイメージにびつたりな行動はないかと考える。その結果浮かび上がった異世界の記憶にある構えを実行した。

きゅつと脇を締めて握った拳を眼前に構え、すたーんと軽やかにステップを踏む。ゴーレムの身体ではズシーンズシーンと重々しいが、先日の片足跳び実験で「飛び跳ねる」という動作に馴染んでいたが故の「慣れた動き」を演出できた。

沙耶華に見せたなら「ボクシング？」と訊ねるであろう、異世界の拳闘スタイルだ。

「ヴォツヴォツ（しゅっしゅっ）」

軽くジャブなど出してみるが、複合ゴーレムの腕では「ぶおんぶおん」と風切り音を鳴らす高速ストレートパンチのようだ。当たったら痛いでは済まないだろう。カレンまであと少しという所まで詰めていた傭兵団員は、これで完全に足を止められてしまった。

「うおっ！ あのゴーレム、闘士の真似事まで出来るのかよ！」

「だからあんなに動きが早いのか」

「普通のゴーレムにあんな動きさせたら、すぐ自壊しちまうぞ。よく身体が持つもんだ」

「一体どんな素材で作られてるんだらうな？」

観客席では召喚獣やゴーレムに詳しい者達が、複合ゴーレムの動きから推測できるハイスペックさに感心を示す。そして今後あの型がゴーレムの主流になるなら触媒の値段と稼働時間に問題を残す召喚獣は廃れていくかもしれないと、触媒暴落の可能性について論じ合っていた。

実際は一体製造するのに必要な素材や技術、製造期間などを考えると、高位召喚獣の高級触媒を二〇体分ほど購入した方がまだ安くつく。少なくともあと数年は、触媒市場に大きな変動が起きる事はないだろう。

ともあれ、後衛を急襲してそこから崩すという作戦が失敗した事により、紅狼傭兵団は完全に勢いを殺された。残った団員で陣形を立て直すも、堅実に立ち回るガウイクとマンデルの連係にレフトカレンの援護が加わり、どんどん押されていく。

特に、時折突っ込んできそうな足音を響かせる異様に素早いゴーレムの重圧には動きを乱される。これは単にコウがステップなど踏みなれていないので時々バタバタと足踏みをしてしまっているだけなのだが、そんな事とは知らない相手はフェイントでプレッシャーをかけられていると感じる。

「く……っ、やはり実力者集団に小手先の策は通用しなかったか」

「この上は出来るだけ粘って、我々の実力を印象付けるまでだ」

格上を相手にどれだけしつかり戦えるのかを示せば、今後の仕事にも良い影響を与えられる。

ガウイク隊は手の内を見せぬよう着実に個々の実力差のみで紅狼傭兵団を追い詰めていき——
やがて最後の一人を討ち取った。

既に明らかとなった戦いの結果を称える歓声の中で、進行官より決着が告げられる。

「そこまで！ 勝者、ガウイク隊！」

ガウイク隊は、紅狼傭兵団を下し予選を危なげなく勝利で飾ったのだった。

「ヴォヴァアア（勝ったー）」

4

武闘会の試合は隔日で行われる。昨日、紅狼傭兵団と戦ったコウは、アングギー博士の研究所にて、複合体各部の検査を受けていた。

「まだうまくたちまわれなくて、ちょっとオロオロしちゃったよ」

「そう？ コウちゃん、結構活躍してたと思うけど」

検査中コウの話し相手になっている沙耶華も試合を観戦していたらしい。研究所でのお手伝い作

業にもすっかり慣れたようだ。そこへ来客を告げる鐘が鳴り、いつかのようにレイオス王子がやって来た。沙耶華はお茶の用意をしにそそくさと席を外す。

「コウは検査中か」

「こんにちは」

レイオスも昨日の試合は見ていたそうで、まだ実力を見せていないであろうガウイーク隊と、隊の中では新参者であるコウ自身の働きについて話題を振る。

「まだ戦い慣れていないように感じたが、あんな動きをすればその身体に相当な負荷が掛かったのではないか？」

「念の為に検査してるけど、大丈夫みたい」

「複合体は特別製じゃからの、あの程度の動きでそうそうガタなぞでんわい。クワツカカカカ」

複合体の疲労度を調べた博士は、自信満々にそう言って笑う。実際、複合体の状態は極めて良好で、どこにも異常は見つからなかった。

次の試合でも複合体の高性能を見せてやるのじゃー、と何故か高笑いしている博士に、レイオスは先ほど入手したばかりの情報を伝える。

「本戦でガウイーク隊と当たる相手がヴァロウ隊に代わったようだぞ」

「なぬ？ 小僧達の次の相手はたしか西方から来た、どこぞの冒険者集団ではなかったか？」

「今朝みんなで集まった時、ヴァロウ隊と当たらなくて助かったって言ってたよ？」

「そのグループが罰金を払って棄権した。本戦開始前だったから承認されたそうだ」

なんでも酒場でヴァロウ隊の隊員と揉めたらしく、その喧嘩で冒険者集団側のメンバーが怪我を負ったという。あくまでその場で揉めただけで、喧嘩に他意はないそうだ。

メンバーが欠ける事となったそのチームが棄権した為、ガウイーク隊の対戦相手が空欄に。急遽対戦表の組み替えが行われ、予選で敗退したグループの中から復帰希望者を抽選で繰り上げる事が決まった。ヴァロウ隊と対戦する予定だったグループは、その繰り上がり本選出場グループと対戦する事になり、ヴァロウ隊の対戦相手には、同格であるガウイーク隊が当てられた。

明らかに格下となる繰り上がりグループをガウイーク隊に当てると、他のグループに対して公平性に欠けるという理由らしい。観客は喜びそうだが、ガウイーク隊にとってはいい迷惑である。

「順当に勝ち残れば、決勝で俺達と当たる事になるな」

含みを持たせた言い回しでコウの反応を窺うレイオス。しかしコウは、作戦が変わるなら早く皆の所に戻って話し合いをしなければとそわそわしている。

「コウちゃん聞いてないみたいですね」

「……」

お茶を持って来た沙耶華がそう言って、カップをテーブルの上に置いた。どうやらコウは功名心や対抗心、闘争心といった感情があまり強くないらしい。そんな傾向を感じ取ったレイオスは、とりあえずソファアに身を沈め、沙耶華を膝に引っ張り込んで癒される事にした。

「ちよつ、わたしまだお仕事が」

「お前はいつも働いているな」

少し荒れていないか？ と、沙耶華の手を取ったレイオスは、そこに唇を押し当ててみたりするのだった。

レイオス王子から聞いた情報を知らせにコウがガウイク隊の宿泊している宿に行つてすぐ、武闘会の主催者からも同じ内容を伝える使者が遣わされた。隊員が非常招集され、個人戦の予選を突破したリーパとダイドも交えて対ヴァロウ隊の作戦会議を行う。

「向こうも予選では全く手の内を見せていないからなあ」

ガウイクの言う通り、彼の魔法剣「風斬り」や、レフの呪法の杖「流動の御手」と同様に、ヴァロウ隊も色々と特殊な武器を持っている事が分かっている。尤も、ガウイク隊には隠し玉の宝庫のような存在のコウが居る訳だが。

「多分、全力でやる事になるだろうな」

ガウイクの呟きに頷いて肯定したマンデルが、試合中の動きについて指示を出す。

「コウはタイミングを見計らつて武器を装備してくれ」

恐らく魔術が使えるという情報ぐらひは把握されているので、相手が知らない事を効果的に使うのだ。

どこからともなく武器や防具を出し入れできるコウの特殊な能力は、試合では勿論、博士の公開実験でもまだ見せていない。見た目通りの丸腰であるとは限らない事自体を武器にする狙いだ。

「ヴァロウ隊の構成は、まず司令塔である隊長のヴァロウ。彼は戦士だが、特殊な弓をメインに使う」

それは矢が自動装填される連射性に優れたナツハトーム帝国製の機械式連弓で、攻撃目標の指示にも使っているらしく、直接攻撃も援護もこなす。

「あの機械弓はとにかく連射力が半端じゃないので注意が必要だ」

「あれつてすぐおもたいよねー」

マンデルが注意点を挙げると、実際に射つた経験のあるカレンがそう言って肩を竦めた。

次に副隊長の女剣士。彼女の使う剣は、衝撃波を放つ魔法剣である事が知られている。剣を受け止めただけでも、その際に放たれる衝撃波でダメージを負ってしまうので、まともに打ち合うのは避けなければならない。

「隊長の「風斬り」で対抗するのが無難でしょう」

「だな」

マンデルの対処案に、ガウイクもそれが妥当だと同意した。

ヴァロウ隊の前衛はその女剣士と、盾持ちの重戦士が主に務めているようだ。他は隊の上位メンバーである戦士と魔術士、あとは呪術士らしき異装束の少女。確認出来ている範囲で特に注意す

べきなのは、ヴァロウ隊長の機械弓と女剣士の魔法剣だ。

「向こうは対人戦闘の専門家ですからねえ」

マンデルの言葉に頷きつつも、ガウィークはコウに視線を向けて言う。

「まあ、そういう意味じゃあこっちにコウが居るのは強みでもあるな」

「ボク？」

ヴァロウ隊は普段あまり人外の類を相手にしていない集団なので、コウが普通の人間に出来ない事が出来る点は有利に働くだろう。

全員の距離を空け過ぎず、ダンジョン探索時の感覚で適度に固まって行動する陣形で、特にレフとカレンを狙われないようコウは二人の壁役を強く意識する。

概ね方針は決まったなど、ガウィークは一つ息を吐いて仲間を見渡す。

「あとは、実際に剣を交えてからだな」

その言葉に、明日の出場メンバー達は皆頷いて答えたのだった。

——翌日。

今大会でも特に注目の一戦という事で、闘技場には沢山の観客が押し寄せていた。そのヴァロウ隊とガウィーク隊の試合は午後からだが、午前の部にレイオス王子率いる「金色の剣竜隊」の試合があるので、朝から人出が多い。

レイオス王子の試合は開始してすぐ終わってしまう場合が殆どだ。ある意味、手の内を読めないとも言える。

というのも、メンバー全員が特殊な効果を持つ武器を装備しており、序盤から景気よくそれらの力を振るうので、対戦相手は成す術なく蹂躪されてしまうのだ。

優勝候補の試合を偵察する傭兵団や冒険者グループも、効果的な対応策が思いつかないとお手上げ状態だった。

「さすが、伝説級の称号を目指そうってだけはあるな」

「正直ガウィーク隊には勝っても、王子の隊には勝てる気がしませんね」

観客席の一角からレイオス王子達の試合を観察していたヴァロウ隊の副隊長、女剣士のストウアと、彼女と常に行動を共にしている重戦士のカルヴァンが感想を述べ合う。

その後、二人はヴァロウ隊が宿泊している宿へと足を向けた。残りの試合には特に見るべきモノなどない。

「ガウィーク隊の隊長には、やはり副長が当たりますか？」

「ああ、恐らく向こうからそう立ち回ってくるだろう」

彼女の魔法剣「崩波折り」に接近戦で対抗できるのはガウィーク隊長の魔法剣「風斬り」だけであり、無理に奇を衒う事はない。裏を返せば接近戦で「風斬り」に対抗できるのは「崩波折り」だけという事でもあり、きっちり実力勝負にすれば良いのだ。

「あの魔導兵を押し立ててくる可能性は？」

「ないな。確かに面白いゴーレムではあるが、あれは後衛を護る為の壁だろう」

ゴーレムは本物の強者を相手取って戦える程の実力は備えていないと看破するストウア。丈夫であるのは考えるまでもなく、柔軟性や素早さにも目を見張るものがあるが、幾らでも対処法はある。臨機応変に動ける人間の方がよほど手強いというのが、彼女の持論であった。

「向こうの副長もオールラウンドに戦える実力者のようだぞ？」

「ふっ、隊長や副長には指一本触れさせやしませんよ」

ストウアが戯れに投げかけた言葉に対して、ヴァロウ隊の守護盾を自負するカルヴァンは不敵にそう言っただけを見た。

大入り満員となった午後の闘技場観客席。昨日までは空席が目立った貴族専用の特別席も紳士淑女で埋まっており、進行官の口上にも力が入る。

「これよりー！ 王室主催、トルトリュス大武闘会本選午後の部ー！ ガウイーク隊とヴァロウ隊のー！ 試合を執り行うー！」

ひと際大きな歓声上がり、両グループが闘技場に姿を現した。双方が配置について陣形を整える間、観客達の興味はガウイーク隊の複合ゴーレムとヴァロウ隊の機械化連弓に注がれている。貴族達の座る特別席には、レイオスに連れられた沙耶華の姿もあった。

「あ、コウちゃんだ。大きいから目立ってるけど……狙われないかしら」

「この戦いでコウが前に出る事はないだろう、恐らく後衛の護りに徹する筈だ」

レイオスの予測通り、ガウイーク隊は壁役となるコウの近くに後衛の射手カレンと攻撃術士レフが立ち、前衛のガウイークとマンデルも二人と同じ幅で並ぶ、相手に対して縦長な陣形だ。

対するヴァロウ隊は剣士ストウアと重戦士カルヴァンが最前列に構え、中列の真ん中に機械弓持ちの戦士ヴァロウ、その左右に戦士と魔術士が並び、最後尾には呪術士らしき少女の姿があった。

やがて開始の合図が告げられ、注目の一戦の幕が開いた。

双方共に相手の出方を窺う膠着した状態から、まずヴァロウが射掛けた。

ナツハトム製の機械化連弓の中でも最高級品であるピネー級。機械弓本体に装着する矢箱は通常で三〇本、拡張すれば五〇本まで矢を収められる。次々と弦に自動装填される矢を引いては放つという構造が、通常の弓では考えられないペースでの連射を実現している。

ヴァロウ隊から放たれた先制の矢は僅かな間に五発。後衛はコウが完全に壁となっているので本人は勿論、カレンとレフにも被害はない。マンデルは盾を構えて矢を防ぎ、ガウイークはとりあえずマンデルの陰に入ってやり過ごした。ちなみに、毎秒一発程の連射速度である。

矢に弱体化の工夫がなされているこの試合ではあまり威力は望めないが、連射性を印象付けて、やり辛く思わせる効果は狙える。

ガウィーク隊もレフの攻撃魔術やカレンの放つ矢で、相手の防御力や対処力を押し測る。そこそこ強力な攻撃魔術がヴァロウ隊中列に控える戦士に盾で防がれた事から、見た目はただの無骨な大盾ながらも、対魔術処理の施された装備であると明らかになった。

暫く地味な心理戦が続いて観客は不満気だが、ヴァロウ隊は既に仕掛けていた。

「——リト、準備はできてるか？」

「——大丈夫です、安定しました——」

“対の遠声”という、離れた場所にいる者同士で会話が出来ると特殊な呪術式伝送具があるのだが、ヴァロウ隊の全員がその中でもとりわけ性能のよいモノを所持していた。

一番後方に控える見た目は気弱そうな隊員のリトアネーゼが、ヴァロウ隊長からの確認に準備が整った旨を答える。

ヴァロウ隊が対の遠声を使っている事は、外からでは分からない。

「——頃合だ……行け、リト——」

「——はいっ。行つて来ます！——」

ガウィーク隊からはエイオア出身の呪術士であろうと認識されている彼女だが、実は呪術士に直接戦闘力を持たせた珍しい職種とされる“影術士”であった。

影術士は暗殺と後方攪乱のプロフェッショナルだ。自身の幻影を作り出してその場に残し、呪術の部分結界で姿を隠しながら闘技場の壁際を大回りして相手の背後から近付き、無防備な後衛を奇襲で仕留める作戦であった。

ヴァロウがガウィーク隊員の注意を惹きつけ、リトの奇襲を援護する。闘技場の壁に辿り着いたリトは、足音も砂埃も立てず滑る様に移動を始めた。

もつと派手にやれと不満を垂れている観客も、あと少しすれば驚きの歓声で沸き返るだろう。ヴァロウはそんな事を思い浮かべながら機械化連弓の弦を引く。影術士の隠行術で隠されたリトの姿は、誰にも見つけるなど出来ない。

——普通ならば。

『あれ？ なんだらう？』

コウは闘技場の壁際で湯気のように揺らめく魔力の流れを見つけ、首を傾げた。壁際をすーっと移動してくる、アーチ状に揺らめく魔力の帯。背後に陣取っていたレフにその事を伝えると、それは恐らく影術士の隠行術ではないかという返答があった。

魔力を視認出来るコウには、影術士が結界を維持する為に放っている僅かな魔力を捉えられたのだ。警戒するレフ達だったが、迎撃しようにも相手の魔力を感じられる程近付かなければ、正確な位置を把握する事さえ出来ない。

さすがにそこまで距離を詰められるのは危険なので、コウが迎撃に出る。ヴァロウが連射する矢も相変わらず飛んで来ているので、コウはその対策として幅広の重盾を出す。平均的な身長の人

立ち読みサンプル はここまで

男性を丸々覆えるような盾をレフとカレンが二人掛かりで支え、降り注ぐ矢から身を護る。

「おもいー」

「……重い」

「すぐ戻ってくる」

一部の観客席ではどこからあんな大きな盾を出したのかとざわめきが上がっていたが、遠目に気付かなかっただけで元から背中に担ぐなりしていたのでは？ という推測に落ち着いた。

観客の大多数はそんな事の答えよりもこの膠着した戦いが変わるのを心待ちにしており、あの一風変わったゴーレムが動いた事で何か新しい展開を見られるのではないかと期待していた。

「なんだ、どうしたコウ！」

突然隊列から離れ、壁に向かって走って行くコウにガウイクが声を掛けるも、説明している暇はないとコウは判断。背中に「あとで！」と文字を浮かべると、紅狼傭兵団との対戦でも見せた全力ダッシュを披露した。

壁際を移動する小さな結界との距離を一気に詰めたコウは、結界破りの力を纏わせた腕で掃い取るように難い。するとその一帯だけ歪むように景色がぶれ、ヴァロウ隊の最後尾に居る筈の黒装束を纏った少女が現れた。

「ひえっ。ば、バレちゃった！」

リトの隠行術を見破られると、ヴァロウ隊の後方に控えていた彼女の幻影がすーっと薄くなつて消える。非常に珍しい影術士の術が見られた事で、観客達も俄かに沸き立つ。

同時に、それを見破ったコウに対して、結界を無効化する機能が付いているのかと、複合、ゴーレムの計り知れない潜在能力に驚嘆している。

「あ、あうあう……」

壁を背にして巨漢ゴーレムと対峙するリトは、小さな身体を壁に押し付けながらズリズリと横に移動して距離を取ろうと試みるものの、足が震えているせいか上手く逃げ出せないでいる——ように見える。

——チィッ。まさか結界が破られるなんて、一体どういうゴーレムなんだコイツは……とにかく隙を見て核部分でも潰せば……——

怯えた素振りにはほぼ演技である。弱々しい見た目は相手に攻撃を躊躇させて油断を誘う、彼女の武器でもあった。人道的な信条を持つ相手には特に効果的である。

しかし、コウには相手の胸の内が筒抜けなので、怯えているふりをしながらゴーレムや召喚獣の急所となる部位を探っているその思惑はバレバレだった。

『なるほどー、外見もそういう武器になるのかー』

何やら学習したコウだったが、彼女の思惑はともかくとして、見た目が細く身体も弱そうな事には変わらない。コウは加減して攻撃しようと手を伸ばす。